

子どもが発する言外のサインを読み取る力を養成するための教育課程

—手書き文字とデジタル文字の比較から—

小湊真衣，開田有希

抄録：

本調査では、将来子どもと接する職に就くことを目指して学修中の学生を対象として、彼らが子どものメッセージの何に注目し何を読み取るかに注目した。まず子どもからのメッセージが手書きであるかデジタルであるかによって、そのメッセージに対する印象にどのような変化があるかを検討した。次に学修課程の違いによって子どものメッセージの読み取り方にどのような違いが生じるかを検討した。調査の結果、子どもからのメッセージが手書き文字である場合の方が「賢さ」イメージが弱くなり、「若い」イメージが強くなる傾向があること、デジタル文字の方が「嬉しさ」や「積極性」のイメージが強くなる場合があることが示唆された。また、自由記述の結果から、保育者養成課程の学生は子どもの発言内容を共感的・受容的に受け止める傾向があるのに対し、教職課程科目履修中の学生は、評価的・指導的観点から子どもの発言内容を分析する傾向がある可能性が示唆された。

はじめに

本研究の目的は、教職に就くことを目指して学修中の学生が子どものメッセージを読んだ際に想起するイメージの内容及びメッセージを書いた子どもの心境の読み取りに影響を与えている要因について検討し、教職課程における教育内容への提言を行うことである。生徒指導、生活指導、教育相談を行う上では、子どもが発するメッセージに対する感受性や共感性のほか、その時々の子どもの気持ちを敏感に察し、子どもの状況を理解する力が必要とされる。子どもが発するサインやSOSは、不登校やいじめといった実際の行動としてあらわれるもののほか、様々なものがあると推察されるが、例えば文部科学省（2012）は「近年、災害や子供が巻き込まれる事件・事故による影響や、生活習慣の乱れ、いじめ、不登校、児童虐待など、子供の心の健康問題が顕在化」していることをふまえ、「非常災害時の子どもの心のケアに関する調査」を実施し、「教職員による健康観察の必要性、学校における心のケアの基本や健康相談のポイント等を具体的に示し、日常から心のケアを進めていくための方策等」を示している。ここでは、「非常災害時の子どもの心のケアに関する調査」という特徴上、子どもの心の健康問題に着目されているが、教員による子どもの状態の日常的な観察は重要事項といえる。また、自殺のサインに関して文部科学省（2014）は、「子どもに関わる大人は子どもの変化を的確にとらえて、自殺の危険を早い段階で察知し、適切な対応ができる」ようにする必要性を指摘している。このことから、子どもが発する細かなサインやSOSに気づき、読み取り、それを生活指導やカウンセリングに繋げていく力を、子どもと関わる仕事に就く者は身につけておく必要があることがわかる。

子どもに対する共感性に関する要因としては、子どもとの継続的な接触体験（佐々木ら，2010）や体験教育等の影響（長屋・小河，2015）が指摘されているが、子どものメッセージに込められた心境を読み取る力を、教室内で行う教員養成課程の授業の中でどのように育成していくかということは、教職課程における課題であるといえよう。

子どものメッセージのデジタル化

ただし、子どものサインを読み取る力について考える際は、近年の日本におけるメッセージ発信方法の急激な変化を考慮に入れる必要がある。現代の日本社会は急速にデジタル化が進んでおり、子ども達は初めは防犯の名目であることが多いものの小学生のうちから携帯電話を手に入れ、そのメッセージ機能を使い、デジタル文字で保護者や友人とやりとりをするようになっていく。また、学校内での教員とのやりとりを見ても、総合的な学習の時間等で校内パソコンを用い、ローマ字で文字入力を行い、デジタル文字で提出物等を作成するなど、子どもが教員にデジタル文字で書かれた文章を提出する機会が増えている。このことについて、例えば文部科学省(2017)は、子どものスマートフォン等を用いたやりとりについて、子どもに対してだけでなく、保護者に対しても注意喚起を促している。これらの現状を鑑みると、これから教職に就く学生には、従来のように子どもの手書き文字を観察し、そこから彼らの気持ちや本心、心情を読み取る力だけでなく、デジタル文字のメッセージからも書き手の気持ちを把握しようとする態度や共感しようとする力が求められているといえる。

筆跡を手掛かりとした書き手のパーソナリティの推測

文字や文章から書き手の背景や心境を把握することに関する研究は成人を対象としたものが多い。海外においては、例えば Vine (1974) は 12 人分の筆跡を評価者に提示し内向—外向性と神経症傾向に関して順位づけを求めた。その結果、どちらの尺度においても評価者間の判断の一致は高かったものの、評定者による特性の見立てと筆記者の実際のパーソナリティ検査結果との関連は低かったと報告している。

また日本でも、筆跡と書き手のパーソナリティとの関連は検討されてきた(黒田, 1980; 横田・小谷津・伊藤・渡辺・平野, 1981; 横田, 1983) が、比較的最近の研究としては吉村(1991)が、論理的な文章(小論文)と気持ちを伝える文章(手紙)を取り上げ、ワープロ文字・きれいな手書き文字・きたない手書き文字で書いた場合の、文章に対する受け取り側の評価を検討している。その結果、手紙の場合は「論理性」「内容の優劣」の面でワープロ文字の方が高評価であり、「心がこもっている」「あたたかい」の面では手書き文字の方が高評価であった(吉村, 1992)。また、小論文の場合、ワープロ文字でもきれいな手書き文字でも「内容の優劣」には差がなく、きたない手書き文字の場合は低評価になることが示された(吉村, 1991)。小論文の質の要因を組み合わせた場合、きたない手書き文字に対する低評価は、質の高い小論文の場合に顕著であることを報告し、文字の種類の違いは、文字から推測される文章の製作者の態度や能力の評価に影響する可能性を指摘している(吉村, 1993a, 1993b)。

本調査の目的

このように先行研究では、これまで主に成人を対象として、筆跡と書き手のパーソナリティの関係や、手書き文字とデジタル文字における受け取り手の印象形成について検討されてきた。一方、まだ手書きの文字の形態が十分に整っていない幼児・児童・生徒などの文字やメッセージについての研究はこれまであまり注目されてこなかったのが現状である。しかし、昨今の子どもをめぐるいじめや自殺等の重大な問題を鑑みると、子どもの文字から子どもが発する言外のサインを読み取る力の養成は喫緊の課題と言える。学校や園にいるのは先生に対して何でも相談できる子どもばかりではない。例えば被虐待児などは教師にそれらの存在を隠そうとする傾向があるほか、いじめがあるクラスでいじめに関するアンケートを実施しても、いじめの存在が子どもたちからの報告として上がってこないこともある。このように、何らかの理由により先生に対して直接相談を持ちかけられない子どもに対しては、仕草や表情、何気ない発言などから子どもの心境を把握しようと常に心がけていることが必要であり、特に不安や悩み、怒りなどの負の感情を抱えている場合は、その心境にいち早く気づき、教員の側から子どもに働きかけていくことを視野に入れていかなくてはならない。その際、子どもが自ら綴ったメッセージは教師が子どもの様子に気づくための手がかりとして活用することができるものの一つである。教師に対して直接悩みを打ち明けたり、助けを求めたりしているメッセージからその緊急性を読み取ることももちろん大切であるが、普段の日記やリアクションペーパーに綴られた文章の様子もしくは文字の書き方などから子どもの心身の調子を把握することができれば、学校や園において、より教育相談的な関わりを行うことが可能になると考え

られる。

そこで本調査では子どものメッセージを見た際に想起するイメージの内容及び、メッセージを書いた子どもの心境の読み取りに影響を与えている要因について検討することを目的とした。学校や園への情報端末機器の導入が進んでいる現代においては、子どもが教師に対してメール等でデジタル化されたメッセージを送る頻度も増加していることから、今回の調査では刺激として子どもが自由記述欄に自由に綴った手書き文字と、それをデジタル化した文字の2種類を用意した。

本研究の問題意識は、教職もしくは保育など、子どもと関わる職に就くことを希望している学生が、子どもの文字から子どもの状態をどう読み取るのかということと、そしてそれをどのように生徒指導、生活指導、教育相談を行う上で生かし、子どもの言外のサインに気づけるような力を養成できるかという点にあり、ここに本研究の独自性があるといえる。

方 法

調査協力者

関東圏の私立大学にて教職科目を履修している学生もしくは私立短期大学にて保育者養成課程に在籍中の学生を対象として協力者を募った。学生はいずれもその年の4月に学校に入学した1年生を対象とした。調査への賛同が得られた協力者のうち、回答内容に不備があったものを除き、最終的に教職課程履修中の学生59名（男性50名、女性8名、不明1名；平均年齢18.24歳、SD=0.42）、保育者養成課程に在学中の学生47名（男性0名、女性46名、不明1名；平均年齢18.28歳、SD=0.45）からの協力を得た。

手続き

調査は2018年6月中旬から同月下旬にかけて、授業外の時間を利用して実施された。

調査内容

質問紙のタイトルは「手書き文字とデジタル文字に関する調査」とし、フェイスシートで倫理的配慮に関する説明を行った。調査趣旨への賛同が得られた協力者に対しては性別や年齢のほか、日常的に子どもと触れ合う機会の有無等を尋ねた。

刺激としては、小学生の子どもが学童保育での思い出を手書きで綴ったメッセージと、それらをパソコンでデジタル文字化（MSゴシック）したものを提示した（表1）。なお、子どもの誤字脱字等は訂正せず、子どもが書いた文章や文字をそのままデジタル文字化した。

今回、子どもが経験したことに関する報告や思い出についてのメッセージを刺激として取り上げた理由は、こ

表1 質問紙で提示した刺激

刺激1： たのしめました。（すご～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～く！！） （理由） 1～6年生がみんなで色々な遊びをするから
刺激2： 友達と遊んだりするのは楽しかったけど新しい学童になるのがざんねんでしかたありません。はん活動でも、たくさんのはんとかかわりをもてとても喜しかったです。自分のはんを作ったりはん長や福はん長として活やくできたのはとてもよかったです。

表2 質問紙タイプごとの協力者の内訳

	タイプ1 (手書き刺激)	タイプ2 (デジタル文字刺激)
教員志望学生	33名	26名
保育士志望学生	24名	23名

うした日記や感想文形式のメッセージの方が、子どもが悩みや怒りなどを直接特定の誰かに向けて表現したメッセージよりも教員や保育者が日常的に目にしたり、手に入れたりする機会が多いと考えられたためである。

質問紙は、手書きの刺激を提示したものとデジタル文字の刺激を提示したものの2パターンを用意し、質問紙の種類が2パターンあることは協力者に伏せた状態でランダムに配布し回収した(表2)。

子どものメッセージに対するイメージを調べるための形容詞対は、項目の意味を明確にするために両極対とした。形容詞対の選出にあたっては、井上・小林(1985)が子ども観やパーソナリティ認知といった人の人格を対象とするSD法のイメージの測定でよく用いられている形容詞のうち、有効な尺度として挙げている形容詞の中から、調査者2名による協議によって調査協力者の回答にかかる負担を考慮し10項目を選出した。ただし、そのうち「元気な—疲れた」や「新しい—古い」などは、それぞれ「元気な—沈んだ」「若い—老いた」とするなど、子どものメッセージに対するイメージの測定としてよりふさわしい形容詞になるよう若干の変更を加えた。

今回の調査では、学生がメッセージからどのようなイメージを読み取るかに注目したが、Vine(1974)が指摘しているように、評定者による筆跡を手がかりとした特性の見立ては実際のパーソナリティ特性と合致しない可能性もあるため、場合によっては安易な決めつけをせず、「この情報だけでは判断できない(どちらともいえない)」という判断を下すことも重要である。そこで今回は「4 どちらともいえない」を中央に置き、左側に「7 非常に」「6 かなり」「5 やや」、右側に「3 やや」「2 かなり」「1 非常に」を配置した7件法で回答を求めた。

また、それぞれのメッセージを書いた子どもの心境について自由記述で尋ねた。教示文は「このメッセージを書いた本人の心境について、何か伝わって来るものもしくは読み取れたことがあれば、その内容についてお答えください」とした。この質問に対して、特に何も読み取れないと思った場合には「特に何も読み取れないと思う」という選択肢に丸をつけるよう求めた。

倫理的配慮

本調査では、以下の倫理的配慮を行った。まず、質問紙のフェイスシートに、回答内容は統計的に処理を行い、回答内容に関して個人が特定されることはないこと、回答済みの質問紙は適切に保管すること、データの入力および分析が終了し次第、質問紙は適切に処分することを明記し、口頭でもそれを説明した上で、調査への参加不参加は授業における成績とは一切関係なく、協力しなかったからといって学業上の不利益は生じないことを説明した。

結果と考察

イメージの構成

メッセージに対するイメージを測定した10項目に対し、探索的な因子分析により因子構造を検討した。10項目の相関係数行列の固有値は4.105, 1.380, 1.151, .964, .713と減衰し、第3因子までの累積説明率は66.4%であった。ここでは固有値の減衰状況とスクリー・プロットの形状から総合的に判断し、3因子解を採用することとした。そして、重み付けのない最小2乗法と直接オブリミン回転による因子分析を行った。表3に直接オブリミン回転解(因子負荷量)、共通性、因子間の相関係数を示す。3因子の累積分散説明率は52.8%であった。

第1因子は「嬉しい(悲しい)」「楽しい(つまらない)」「元気な(沈んだ)」といった気分に関する項目の負荷量が高いため気分因子、第2因子は「思いやりのある(思いやりがない)」「あたたかい(冷たい)」といった性格特性に関する項目の負荷量が高いため性格特性因子、第3因子は「若い(老いた)」といった、年齢に関す

表3 メッセージに対するイメージの因子分析結果（重み付けのない最小2乗法、直接オブリミン回転）

	因子			
	1	2	3	共通性
[気分因子]				
嬉しい-悲しい	.812	-.100	-.076	.603
楽しい-つまらない	.771	.028	.465	.946
積極的な-消極的な	.766	.225	-.124	.729
元気な-沈んだ	.723	.140	-.146	.592
明るい-暗い	.568	-.088	.149	.345
[性格特性因子]				
思いやりがある-思いやりがない	.151	.917	.094	.985
あたたかい-冷たい	.318	.489	.258	.560
賢い-賢くない	-.075	.390	.099	.154
女性的な-男性的な	.042	.320	-.187	.134
[若さ因子]				
若い-老いた	.023	.094	.460	.234
因子間相関				
因子1	1.000			
因子2	.329	1.000		
因子3	.163	.098	1.000	

る項目の負荷量が高いため若さ因子と解釈した。第1因子と第2因子の間に弱い相関が見られるため、3つのイメージは全く独立というのではなく、複合的なイメージである可能性も示唆されたが、今回の調査協力者は子どものメッセージを読み取る際、その場における子どもの気持ち、その子の性格特性、その子の発達段階といった観点から、メッセージに対するイメージを構成していたと考えられる。

また、因子ごとに負荷量の大きい項目の合計点を気分得点、性格特性得点、若さ得点とし、平均値と標準偏差、Cronbachの α 係数とその95%信頼区間を求めたところ、気分得点は、平均が22.57、標準偏差が4.96、 α 係数が.85、信頼区間が95% CI [0.782, 0.906]であり、性格特性得点は平均が10.46、標準偏差が2.05、 α 係数が.79、信頼区間が95% CI [0.636, 0.874]であった。 α 係数とその信頼区間が大きかったことから、得点の信頼性は高いと判断できるが、若さ得点に関しては、因子を構成する項目が1項目のみであったため、今後は項目の修正もしくは追加が必要であると考えられる。

表示形式によるイメージの違い

子どものメッセージを手書きのまま提示した場合と、内容をデジタル文字化したものを提示した場合とで、そのメッセージに対して抱くイメージにどのような違いがあるかについて教員志望の学生の結果を対象に検討した。各刺激が手書きのまま示された場合のイメージとデジタル化されて示された場合のイメージのプロフィールは図1、図2の通りであり、調査協力者は刺激によって異なるイメージを抱いていたことが明らかとなった。手書きに対するイメージとデジタル化された文字に対するイメージの違いについて、対応のないt検定を用いて2群の平均値差を検定した結果、刺激1の「若い」項目で手書き刺激の方がデジタル文字刺激よりも値が有意にやや高く($t(31.299)=3.602$, $p<.01$, ES: $r=.541$, 95% CI [0.428, 1.544]), 「賢い」項目で手書き刺激の方がデジタル文字刺激よりも値が有意にやや低かった($t(35.694)=-2.556$, $p<.05$, ES: $r=.393$, 95% CI [-2.110, -0.243])。また、刺激2では「嬉しい」「積極的な」「賢い」の3項目で手書き刺激の方がデジタル文字刺激より

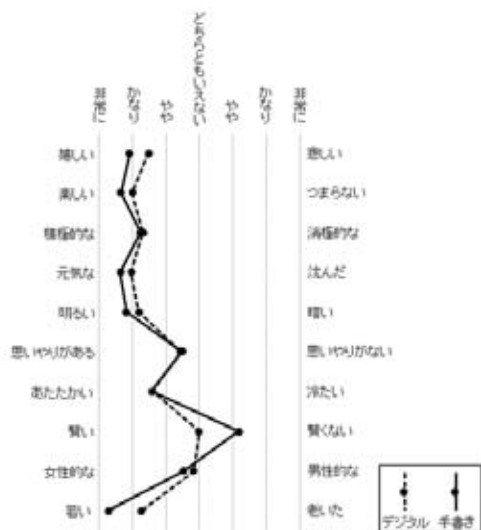


図1 刺激1に対するイメージのプロフィール

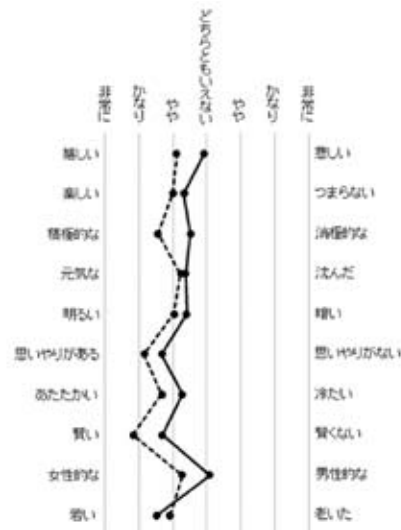


図2 刺激2に対するイメージのプロフィール

も値が有意にやや低かった ($t(57)=-2.238$, $p<.05$, $ES:r=.284$, 95% CI [-1.556, -0.087] : $t(57)=-2.951$, $p<.01$, $ES:r=.364$, 95% CI [-1.627, -0.312] : $t(57)=-2.844$, $p<.01$, $ES:r=.353$, 95% CI [-1.461, -0.253])。

この結果から、子どものメッセージが手書きで提示されると、子どもの年齢的な幼さが読み取りやすい反面、文字の揺らぎや表現の仕方によって、それがデジタル文字化されていた場合よりも「賢くない」という印象を抱いてしまう可能性が示唆された。手書きの文字の方が賢さの面において低評価になった点に関しては先行研究で指摘されていた結果と一致している。嬉しさや積極性に関しては、デジタル文字で示された場合の方が手書きのまま提示された場合よりもポジティブに受け取ることができる場合があることが示唆された。

学修課程の違いによるイメージの違い

次に教員志望の学生と保育士志望の学生について、子どものメッセージに対して抱くイメージにどのような違いがあるかを検討した。刺激1と刺激2の手書き文字及びデジタル文字に対する各課程学修者のイメージのプロフィールは図3-図6の通りであり、対応のない t 検定を用いて2群の平均値差を検定した結果、刺激1に関しては手書き、デジタル文字ともに有意な差は認められなかった。刺激2に関してもデジタル文字では2群に有意な差は認められなかったが、手書きの「賢い」項目で保育者養成課程群の方が教職課程履修群よりも値が有意にやや高く ($t(54)=-2.635$, $p<.05$, $ES:r=.338$, 95% CI [-1.380, -0.187])、「あたたかい」項目でも保育者養成課程群の方が教職課程履修群よりも値が有意にやや高かった ($t(54)=-2.199$, $p<.05$, $ES:r=.287$, 95% CI [-1.227, -0.057])。

この結果から、子どものメッセージに対して抱くイメージは、学修課程の違いによって差が見られる場合があるものの、おおむね似通った内容である可能性が示唆された。

学修課程の違いによる子どもの心境の読み取り方の検討

自由記述において得られた回答について、KJ法を用いて分析を行った。手続きとしては、得られた自由記述から内容を抽出し、それらを各1行程度に要約してラベルを作成した。次に意味の似通ったラベル同士をグループ化しそのグループをカテゴリー化した。その後、カテゴリー間で類似性があると考えられるものについてカテゴリー化を繰り返し、各カテゴリーおよびそれらをまとめる大カテゴリーを生成した（以下、大カテゴリーは【 】, 各カテゴリーは< >, 具体例は「 」で示す）。

刺激1における子どもの心境の読み取り

両群に共通して見受けられたカテゴリーは、子どもの【性格】【感情】【感情のレベル】【気持ちへの寄り添

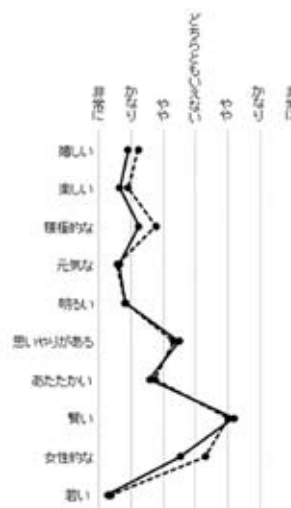


図3 刺激1（手書き文字）に対する
イメージのプロフィール

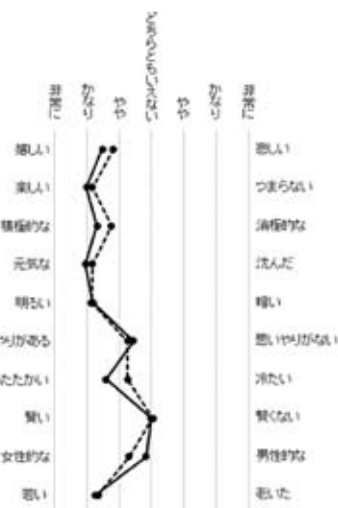


図4 刺激1（デジタル文字）に対する
イメージのプロフィール

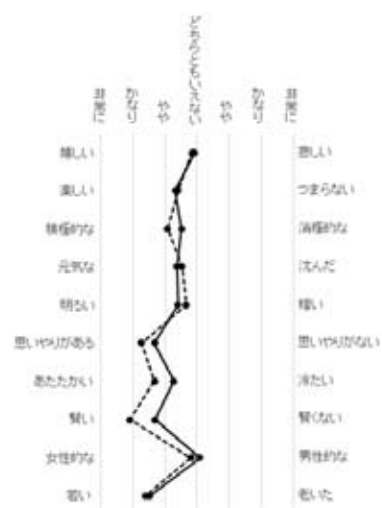


図5 刺激2（手書き文字）に対する
イメージのプロフィール

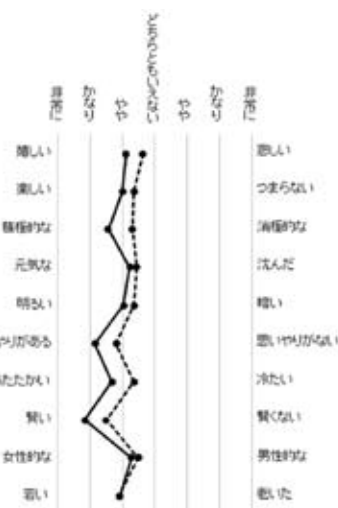
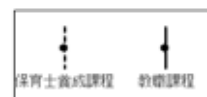


図6 刺激2（デジタル文字）に対する
イメージのプロフィール



い」であった。【性格】については両群とも「元気」「適当」という共通性が見受けられ【感情】については、両群ともに＜楽しさ＞を読み取っていたが、保育者養成課程群はそれに加えて＜嬉しさ＞を読み取る傾向が見受けられた。また両群とも、エクスクラメーションマークの使用や言葉伸ばしの長さから、「とんでもなく楽しかったのだらうと思った」「本当に楽しめたのが、～～～の長さでわかると思う」と【感情のレベル】を読み取っていた。【気持ちへの寄り添い】については両群とも「すご～～～～く楽しそう」等、子どもの表現方法をモデルにした回答が見受けられた。

各群の特徴としては、教職課程履修群は文法や文の構成に注目する傾向があり、「自分の感情を先に書いているからよほど楽しかったのだと思う」「文法が乱れているのも素直な気持ちを書いている証」といった指摘が見られた。一方保育者養成課程群は「すご～～～～く！！のビックリマークから、ああ楽しかったのだと伝わる」と、回答の中で子どもへの共感を示したり、【気持ちへの寄り添い】において子どもが用いた記号（「！！」）や表現（「～～～」）を取り入れた形で回答を行う傾向が見受けられた。

刺激2における子どもの心境の読み取り

両群に共通して見受けられたカテゴリーは、子どもの【性格】【感情】【感情のレベル】であり、【性格】につ

いては両群とも「リーダーシップがありそう」「まじめ」という読み取りを行っていた。【感情】【感情のレベル】については、両群とも「楽しかったけど学童が変わってしまう悲しさの方が大きく伝わった」「楽しさ悲しさの混合」など、「楽しさ」と「悲しさ」というアンビバレントな感情の存在を読み取っていたが、保育者養成課程群はネガティブな感情の方が大きいであろうという読み取りをする傾向があったのに対し、教職課程履修群は相反する感情のうち、どちらの感情の方がより大きいという見立ては行っていない傾向が見受けられた。

また、教職課程履修群に関しては、【友人】との関係について「仲良かったんだろうな」等、他者交流の視点で読み取りを行っていた点や、「親の質が良さそう」等、家庭環境に対する言及が見受けられた点が特徴として挙げられた。また、【本人の持つ力】について「自己評価ができて」「文章力がある」「班長をつとめたのはいい経験になった」等、評価を与える者としての視点から読み取りを行うのも、保育者養成課程群には見受けられなかった傾向であった。

まとめと今後の課題

今回の調査結果より、子どもからのメッセージの内容が同じだとしても、それが本人の直筆で提示された場合とデジタル文字化されて提示された場合では、読み取るイメージの内容に差が生じる場合がある可能性が示された。また自由記述の結果からは、概ね因子分析結果と同じカテゴリーが見出されたほか、保育者養成課程の学生は子どもの感情に共感し、寄り添うという保育士的な視点でメッセージの読み取りを行うのに対して、教員志望の学生は、子どもの文章の書き方からその子の能力を査定したり判断を下したりするといった教員的な視点で読み取りを行う傾向がある可能性が示唆された。これは、子どもの能力を育み、見守り、援助する立場である保育者を目指しているか、子どもの能力を伸ばし、足りない所を補い、評価を下す立場である教員を目指しているかという目標の違いである可能性と、現在進行形で学修している内容やカリキュラムの違いもしくは子どもと触れ合う機会や経験の違いが影響している可能性が考えられる。また今回、保育者養成過程群の学生はほぼ全員が女性であったため、性別による着目点の違いという要因が存在している可能性も考えられる。

教育実践の場においては、子どもが発するメッセージから、彼らの本心やSOSの存在を読み取り、生活指導やカウンセリングへと繋げていかなくてはならない。そのような読み取りが求められる場においては、子どもが書いた文字の筆圧や文字の歪み等から心境を読み取るが必要な場合もあれば、そうした形態にとらわれず、書かれている内容を正しく読み取らなくてはならない場合もある。特に、子どもの中でアンビバレントな感情が存在していたり、SOSなどの隠されたサインが込められていた場合、文字や文の形態と書かれている内容は、そのニュアンスが必ずしも一致しないことがある。また、情報化が進む現代においては、デジタル化された文字やメッセージから、子どもの心境を読み取る力が今後一層求められていくと考えられる。したがって、教職課程においては子どものメッセージから彼らの要求や心境、ニーズをできるだけ正しく読み取るために、どのような指導や実習が効果的なのかを検討していくことも必要であり、それは課題であるとも言えるだろう。今回の調査では、どのような教育方法が子どものメッセージの読み取り能力を後押しするかについての明確な要因を確定するまでには至らなかったが、実際の子どもが書いたメッセージを読み取る機会を設定したり、「子どもからのメッセージを読み取る力」をテーマとしたグループワークやディスカッションの機会を設けるなどして、子どもの何気ないサインを見逃さないためのアンテナを張っておくことの大切さを伝えるプログラム作りをしていくことは有益であると考えられる。ただし、多くの人は書かれた文字から性格特性を読み取るものの、性格と書き文字の特徴との対応は乏しいということが指摘されている（西園・無藤，1993）ことから、読み取られたメッセージや子どもの特性が、実際にどの程度の正確さであるのかについては、今後十分検討していかなくてはならない。また、教師側の勝手な憶測によって子どもに対する思い込みが形成されてしまったり、本来は存在しない「本当の気持ち」があると思い込んでしまうことの問題や危険性も理解しておく必要がある。ただし、特にいじめや自殺など、命に関わる問題に関しては、教師の読み取り力は鈍感すぎるよりはむしろ敏感すぎる方が最悪の事態を防ぐのに役立つといえるのではないだろうか。

今回の調査結果の限界は、調査対象が少人数であり、男女比にも偏りがあったこと、子どものメッセージのバ

リエーションが少なかったこと、イメージ調査に用いた形容詞対が必ずしも適切であるとは言えなかった点である。

調査対象が少人数で男女比に偏りがあった点については、今後調査対象者を増やし、今回の調査結果との比較を行う必要がある。また、今回の調査協力者はいずれも1年生であったため、今回見受けられたイメージや読み取りの差異は大学での授業の影響によるものであるのか、それぞれの学校の学生のモチベーションの違いによるものであるかを検討することができなかった。この点については、今後1年生以外の学年で同様の調査を行うことによって検討していくことが必要である。

子どものメッセージのバリエーションが少なかったことについては今後、調査協力者の心理的な負担を考慮しつつメッセージ内容をより多様にし、子どもが抱える深刻な悩みや、隠された本心にかに気づくことができるかということに焦点を当てる必要があると考えられる。また、今回の調査では子どものメッセージが手書きかデジタル文字かによって抱くイメージに違いが見られるかを検討課題としたが、刺激1では10項目の形容詞対のうち「若い」と「賢い」の2項目でのみ、刺激2では「嬉しい」「積極的な」「賢い」の3項目でのみ差が見受けられる結果となったため、今後の調査ではイメージの全体像を掴むにあたってよりふさわしいと思われる形容詞対を追加し、表示形式の違いによって生じるイメージの差異について更に詳細に検討していく必要があると言えるだろう。また、将来的には子どもが発したメッセージの読み取りだけでなく、保護者から寄せられたメッセージに対する読み取りの力が養成されていくプロセスについても検討する必要がある。

今回は保育者養成課程の学生と教職課程の学生を比較したが、将来子どもと接する職に就くことを希望していない学生との比較をすることで、教職課程履修中の学生のものの見方や考え方の特徴を、より明確にすることができると考えられる。さらに、すでに教職についている現場の教員と、教員養成課程在中の学生のものの見方や読み取り能力の違いについて、比較検討していくことも必要であろう。

引用文献

- 井上正明・小林利宣（1985）. 日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観. 教育心理学研究, 33 (3), 253-260.
- 黒田正典（1980）. 書の心理—筆跡心理学の発達と課題—. 誠信書房.
- 横田仁（1983）. SCT筆跡による性格の診断. 金子書房.
- 横田仁・小谷津孝明・伊藤隆一・渡辺利夫・平野学（1981）. 筆跡とパーソナリティの関係についての実証的研究 (1). 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要, 21, 85-95.
- 文部科学省（2009）. 教師が知っておきたい子どもの自殺予防.
- 文部科学省（2014）. 学校における子供の心のケア —サインを見逃さないために—.
- 文部科学省（2017）. ケータイ&スマホ, 正しく利用できていますか? (小中学生版) (2017年版).
- 長屋佐和子・小河妙子（2015）. 保育養成課程学生の表情認知特性—心理学課程学生との比較による検討—. 名古屋女子大学紀要, 61 (人・社), 99-107.
- 西園薫・無藤隆（1993）. 筆跡と書字意識と性格の間の相互の関連の検討. 日本教育心理学会総会発表論文集, 35, 505-505.
- 佐々木綾子・小坂浩隆・末原紀美代・町浦美智子・波崎由美子・松木健一・定藤則弘・岡沢秀彦・田邊美智子（2010）. 親性育成のための基礎研究 (1) —青年期男女における乳幼児との継続接触体験の心理・生理・脳科学的指標による評価—. 母性衛生, 51 (2), 290-300.
- Vine, I. (1974). Stereotypes in the judgement of personality from handwriting. British Journal of Social & Clinical Psychology, 13, 61-64.
- 吉村英（1991）. ワープロ文字と手書き文字の違いが文章の内容の評価に与える影響 (I). 日本心理学会第55回大会発表論文集, 753.
- 吉村英（1992）. ワープロ文字と手書き文字の違いが文章の内容の評価に与える影響 (II). 日本心理学会第56回大会発表論文集, 539.
- 吉村英（1993a）. ワープロ文字と手書き文字の違いが文章の内容の評価に与える影響 (III). 日本心理学会第57回大会発表論文集, 803.
- 吉村英（1993b）. 手書きとワープロのあいだ. 川浦康至（編）メディアコミュニケーション, 現代のエスプリ, No.306 (pp.170-179) 至文堂.

[Article]

Curriculum for fostering the ability to read children's mood and mind from their sentences.

— Comparing the handwriting and digital message —

Mai KOMINATO and Yuki HIRAKIDA

It's necessary for teachers to understand children's mind, feelings, needs or SOS for supporting their school life. Nowadays, children often write their message with their digital devices. Therefore, the suggestion about their needs or SOS becomes to be more difficult because of their digitalization. The main focus of this study is to examine the factors, which bring up the ability to appreciate children's suggestion. A total of 59 college students who aim to be a high school teacher and 47 junior college students who aim to be a nursery school teacher answered the questionnaire. The questionnaire was asked to describe their impressions about 2 types of children's message (handwriting / digitalized). The results indicated that handwritings often arouse the negative images such as "foolish", "not happy" and "not active". The difference between participants were also been seen. The students aim to be a teacher tend to have the viewpoint for example, to improve the handwriting. On the other hand, the students aim to be a nursery school teacher tend to show more sympathy. These findings suggest that the course of study, the goal and any other experiences will affect their judge and sensibility for children's message.